



暮らし支えた石と板の橋

岡谷市の釜口水門から下ることおよそ1・2キロ。橋原橋のもとに、人ひとりを載せた石が並んでいた。目の前を流れる天竜川を渡るための橋台だったとは思えないほどの大きさだった。

江戸時代には諏訪湖の排水を妨げるような大きな橋

⑦ びったら橋 岡谷市

伊那谷遺産 第2部

を架けることが許されなかった。人々は渡し舟か、川の中に据えた石に板を渡しただけの橋で行き来したという。歩くと板がたわみ、川面をびたびたと打つ橋は「びったら橋」と呼ばれていた。

今でこそ頑丈な護岸の間をとうとうと流れる天竜川だが、掘り下げが行われる



前は川面が岸から近く、川沿いの家にはカニがはい上がってくるほどだった。近くに住む花岡曹伍さん(79)は「深いところに大きな石

毎週火曜日掲載

が二つ、浅いところに小さいのが五つあって、板を渡してあったようだ。昔はこのことを年寄りが縄なしをしながら教えてくれたもんだ」と話していた。(文・倉田高志、絵・片桐美登)



QRコードから天上事務所HPへ

平成26年3月4日掲載
長野日報 / 1面